



『遺品整理屋は見た!』を書いた

吉田太一さん(四十二歳)

人は誰でも死ぬと必ず何かを残していく。でも本人は処分できない。四年間で約四千件の遺品整理*を扱ってきた。

遺族が高齢で片付けられない。葬儀後、仕事に戻らなければいけない。誰も片付けに来ない、と大家からの依頼もある。九割が孤独死という。

遺体の発見が遅れたり、事件に巻き込まれたりした現場は悲惨だ。それでも「絶

対に断らない」が信条。「依頼はSOS、断れるわけがない」

二十八歳の時に軽トラック一台で引っ越し屋を始めた。「何でもやります」を売り物にして遺品も引き受けるように。遺品の供養、消臭消毒、リサイクル、形見の配送。一業者で済む作業ではない。「全部頼んでもいいの?」と驚く客の言葉がきっかけで、二〇〇二年に遺品整理専門の会社「キーパーズ」をアルバイトとふたりで始めた。今は、社員二十人に。

突然死した大学生の部屋を片付けていて、「着信あり」の携帯電話を見つけたことがあった。息子を心配する友だちがこんなにいた、と残された母親に伝わった。「遺品は人間が生きていた証、人生そのもの」と思う。

孤独死の現場では「周囲がちよっと声を掛けるだけで違ったのでは」と無念さを感じる人が多い。現実を伝えたくて書き始めたブログが、『遺品整理屋は見た!』(扶桑社)という本になった。

明日は我が身。私物はほとんど持たない。

二〇〇六年十一月十一日「文」……中村真理子 写真……鈴木好之

*《遺品整理》故人の残した家具、衣類、生活雑貨などを整理して遺族間で分け合ったり、廃棄処分したりすること。最近では、遺品整理専門業者、便利屋などが代行するケースが増えている。